

熱田本平家物語の漢字とその用法の一側面（四）

——月の異名についてのノート——

山 田 俊 雄

一、問題の所在

熱田本平家物語の漢字とその用法とについての卑見を述べた、若干の論の統稿としてこの小篇を草するが、今回は、該書における、月の異名の表記に主題を求め、その用字を論ずるのが目的である。しかし、事のついでとして、該書の前後の時代の文献について若干触れる要があり、ひいて、従来の月の異名の集成などに多少の見解を表したいと考へるに至つたので、前掲の如き副題を添えることにした。筆者の調査したところは、極めて狭い範囲であり、且つ浅薄の誹を斥けることのできぬ体の抄書にすぎない。

先に小論（「真字熱田本平家物語の文字史研究の序」昭和三十一年四月成城文藝第七号）において、玉井幸助博士の論を援用しつつ紹介したやうに、熱田本平家物語の用字の中に「訓読の珍らしいもの」として指摘せられた事項の中に、

示（ウヅキー卯月）
樂（サツキー五月）

の類が見える。これらは、本書の傍訓によつて直にその訓の明らかな場合が少くないが、本書とテクストを同じくする覚一別本の本文との対校によつて帰納せられる場合もあつて、用字とその訓法との連関は、必ずしも明々白々にして一点の疑念なしとのみは論断できない。しかし以下に列挙するところを見れば、その訓法はほど大過なきに近く、後論には事実上何らの支障を生じないものと仮定できるであらう。

そこで、本書熱田本平家物語に用ゐられた、月のよび方をその本文の表記を以て先づ列挙する。（今回は、巻一についての調査の結果も一往加へたが、結局は考察の対象に直接浮ぶものがなかつた。）便宜上、一月から十二月までを、その順序に、かつ同一月の称呼を一括して示すことにする。なほ本稿では、もとより用字法に主眼をおくのであるから、同一

訓法であつても用字の異なるものを全く省略しないでかかげる。調査はすでに数年前に一往完結を見てゐたのであるが、今回は、再度の検証を行ひながら、確実を期した。なほ遺漏のあらんことを恐れる。附訓をみとめたものについては、それを出所の上に注した。

(一月)

正月(一ノ八ウ6)(一ノ四四ウ7)(一ノ六八ウ2)／(二ノ二九オ4)／(三ノ一オ2)(三ノ一オ7)(三ノ一四オ2)／(四ノ一オ2)(四ノ三ウ8)(四ノ一オ5)／(五ノ三ウ4)／(六ノ一オ2)(六ノ二オ5)(六ノ一三オ7)(六ノ一六オ9)(六ノ三〇ウ5)／(九ノ一オ2)(九ノ一ウ3)(九ノ四オ6)(九ノ一二ウ1)(九ノ一八ウ5)／(一一ノ一オ2)(一一ノ一ウ2)(一一ノ四一オ2)／(一二ノ五オ7)(一二ノ一九オ4)(一二ノ一九ウ1)(一二ノ二九ウ4)

(二月)

二月(一ノ三八ウ5)(一ノ六八ウ5)／(二ノ二ウ4)／(一ノ三〇二オ6)／(四ノ一オ7)／(六ノ二二ウ10)(六ノ一五オ4)(六ノ一七オ6)(六ノ二二オ9)(六ノ二八ウ5)(六ノ三〇ウ7)／(九ノ一八ウ8)(九ノ二五オ3)／(一〇ノ一オ7)(一〇ノ八オ7)(一〇ノ一ウ5)(一〇ノ二四オ1)／(一一ノ一ウ2)(一一ノ二オ

1)(一一ノ三ウ8)(一一ノ二ウ4)／(一二ノ二六ウ2)

如(キーキ 三ノ一四オ4)(キサラキ 一〇ノ二一オ9)(キサラキ 一二ノ三四ウ6)(キーク 一二ノ四二ウ10)

(三月)

三月(一ノ二ウ6)(一ノ三九オ1)(一ノ五〇ウ3)(一ノ五ウ6)／(二ノ二ウ5)(二ノ三九オ8)／(三ノ一五オ8)(三ノ二〇オ8)／(五ノ一五ウ6)(五ノ一九ウ2)(五ノ二六ウ1)／(六ノ一七オ7)(六ノ二五オ4)(六ノ二五ウ3)(六ノ二八ウ7)／(七ノ一オ2)(七ノ一六オ7)／(一〇ノ一四ウ1)(一〇ノ二〇オ9)(一〇ノ九オ3)(一〇ノ九オ6)(一〇ノ三五オ6)／(一一ノ一ウ7)(一一ノ二七ウ7)／(一二ノ二オ5)(一二ノ二六オ10)(一二ノ二六ウ2)

霜(ヤヨイ 三ノ一五ウ5)(二ノ三四ウ6)

癩(ヤヨイ 一〇ノ一五ウ2)

縮(ヤー 三ノ一七ウ2)

霧(ヤヨヒ 四ノ三ウ4)

寐(ヤヨヒ 一〇ノ一五ウ5)

(四月)

四月(一ノ六〇ウ7)(一ノ六四ウ4)(一ノ六八ウ3)(一ノ六九オ1)／(二ノ二九オ8)／(三ノ二五ウ7)／(四ノ

六ウ4 (四ノ九ウ8) / (六ノ二四ウ7) (六ノ二八ウ8) / (六ノ二九オ10) / (七ノ二ウ4) (七ノ一五ウ8) / (二〇ノ三二ウ4) (二〇ノ三二ウ10) / (二ノ二七ウ6) / (二ノ二オ6)

卯月(二ノ三八ウ8) / (四ノ三九オ8)

示(ウー 三ノ一七ウ2) (ウツキ 四ノ五オ10) / (七ノ三オ4)

余(ウツキ 一ノ三三五オ3)

(五月)

五月(二ノ一オ2) (二ノ八ウ7) / (三ノ二二オ1) / (四ノ八ウ10) (四ノ九ウ5) (四ノ二〇オ6) (四ノ二二ウ6) (四ノ二三ウ10) (四ノ三九ウ5) (四ノ四〇ウ1) / (六ノ一〇オ1) (六ノ二〇ウ3) (六ノ二九ウ2) / (七ノ五オ10) (七ノ八ウ10) (七ノ一二ウ1) (七ノ一二ウ7) (七ノ一五ウ9) (七ノ一八ウ2) / (八ノ一九オ3) (八ノ二〇ウ3) / (二ノ三七オ6) / (二ノ三一オ10)

五月(ーキ 四ノ一三ウ2) (ーキ 四ノ二六ウ2) (きつき やみ 四ノ四〇オ3) (サー 一ノ三二オ6)
樂(サーキ 三ノ一七ウ2) (サーキ 四ノ一一ウ5)

(六月)

六月(一ノ三三ウ5) (一ノ六〇オ2) / (二ノ九ウ7) (二ノ一四オ9) (二ノ二七ウ4) / (三ノ一ウ8) / (五ノ一オ1)

2 (五ノ五オ3) (五ノ六オ4) (五ノ一六オ2) (五ノ三オ2) / (六ノ二六ウ8) / (七ノ一六オ3) (七ノ一六ウ9) (七ノ一七オ5) (七ノ二〇オ5) (七ノ二〇ウ8) / (二〇ノ三四オ10) / (二ノ三〇ウ4) (二ノ四三オ8) (二ノ四四オ6)

(七月)

七月(二ノ八ウ7) (二ノ三四オ7) (二ノ三九ウ4) (二ノ五三ウ2) (二ノ六四ウ6) / (三ノ三ウ10) (三ノ九オ2) (三ノ一三ウ7) (三ノ一四オ8) (三ノ二五オ7) (三ノ三八ウ5) / (五ノ二四ウ4) / (六ノ九ウ8) (六ノ二七オ7) / (七ノ二一ウ9) (七ノ二四ウ1) (七ノ二四ウ10) (七ノ二六オ6) (七ノ三一オ3) (七ノ四一オ6) / (八ノ一オ2) / (一〇ノ三五オ5) (一〇ノ三六オ6) / (二ノ三二オ3) / (二ノ一オ3) (二ノ三二ウ7)

(八月)

八月(一ノ五三オ2補入) (一ノ六八ウ6) / (二ノ三四ウ4) (二ノ三八ウ7) / (三ノ一三オ10) (三ノ二五オ8) (三ノ三三オ3) / (五ノ六オ5) (五ノ六ウ2) (五ノ一〇オ7) (五ノ二二ウ5) / (六ノ六ウ7) (六ノ一〇ウ4) (六ノ一七オ6) (六ノ二七ウ10) / (八ノ四ウ2) (八ノ五オ1) (八ノ五ウ3) / (二〇ノ三六オ10) / (二ノ二ウ1)

(九月)

- 九月(二ノ三七ウ2) (二ノ三八ウ1) / (三ノ六ウ4) / (五ノ一〇オ5) (五ノ二五オ1) (五ノ二八オ4) / (六ノ二八オ1) (六ノ二九ウ5) / (八ノ六オ8) (八ノ七ウ10) (八ノ八ウ7) (八ノ八ウ10) / (一〇ノ三六ウ9) / (一一ノ三五ウ3) / (一二ノ三オ9) (一二ノ五ウ7)
- 亥(ナーキ 三ノ三ウ10) (ナー 一二ノ三三オ10)

(十月)

- 十月(一ノ三八オ7) (一ノ四〇ウ2) (一ノ六八ウ4) / (二ノ二九オ9) (二ノ四〇ウ6) / (三ノ三三オ4) / (五ノ二オ7) (五ノ三ウ2) (五ノ二八オ7) (五ノ三〇オ4) (五ノ三三オ4) / (六ノ三〇オ9) / (七ノ一六ウ3) / (八ノ一三ウ8) (八ノ一七ウ8) / (一〇ノ三九オ9) / (一二ノ二七オ10)

- 陽(カミキキ 一二ノ三四オ1) (カミナー 一二ノ四〇オ8)

(十一月)

- 十一月(一ノ一〇ウ3) (一ノ四四ウ4) / (二ノ二八ウ10) / (三ノ六オ9) (三ノ二八ウ1) (三ノ三二ウ1) / (四ノ六ウ9) (四ノ二三オ3) / (五ノ三ウ9) (五ノ六オ5) (五ノ三一ウ4) (五ノ三三オ3) / (七ノ一八オ10) / (八ノ二五ウ4) (八ノ二七ウ1) (八ノ三〇ウ3) / (一

- 〇ノ三九ウ9) / (一二ノ八ウ4) (一二ノ九ウ8) (一二ノ二六オ7)

(十二月)

- 十二月(一ノ三オ3) (一ノ九オ3) (一ノ三八オ5) (一ノ五二オ3) / (二ノ二一ウ1) / (三ノ一二ウ4) (三ノ一三ウ10) / (四ノ七ウ2) (四ノ二二ウ1) / (五ノ一五ウ5) (五ノ一六オ7) (五ノ三三ウ7) (五ノ三四オ9) (五ノ三六オ10) / (六ノ一七ウ4) (六ノ一八オ4) (六ノ二八ウ2) / (八ノ三二オ4) / (一〇ノ一〇ウ9) / (一二ノ一六ウ7) (一二ノ二六オ9)

以上が、熱田本平家物語に見える、月の名のすべてである。この一覧表から帰結しうることは、本書では、月の異名といふべきものが、「きさらぎ」「やよひ」「うづき」「きつき」「ながつき」「かみなづき」の六種である。そして、これらは、順序数でいふ月の称呼と併存する。他の月については、確実に異名でよばれたと判断すべき徴証がなく、すべて順序数でいふ月の称呼が用ゐられてゐる。たゞし一月については、すべて「正月」とあって例外がない。これは、ロドリゲス大文典に、月の数へ方の三通りをあげる中に、イチグワツといふ語をふくまないと一致する。

次に、右に指摘した六種の月の異名の表記に用ゐられた文字(および文字連結)は、「うづき」に対する「卯月」と、

「さつき」に対する「五月」と、の二種を除いては、「××月」といふ用字ではなく、すべて漢字一字であらはず方式になつてゐる。このことは、それらの用字が一連の組織をなすものから出たことを推測させるが、漢字の単字の訓といふ観点からみると、前引の玉井幸助氏の本書複製本解説の言のごとく「訓読の珍らしいもの」と映ずる。そこで、訓読の由来を辿つて、しかるべき理由があるかどうかをたしかめ、用字の点から見て、正しいものかどうかをも同時に明らかにすることが課題となつて来るわけである。本稿の筆者は、元より漢字の知識が浅く海表の故事にうといので、ことさらにかゝる些細の事を自らの課題の一部に加へて来たのであるが、本稿の終結で明らかやうに、識者にとつては笑ふべき、無知の告白に終るのである。たゞ雞肋の捨てがたき情に誘はれたものであつて、実は、やはり筐底に埋れさせておくべきものであつた。

二、月の異名とその用字

さて、熱田本平家物語の漢字の用法の中で、月の異名の書き方が、いかなる系列もしくは習慣、さらには伝統につらなるものであるかといふ課題は、該書の用字法研究の小部分をなすものではあつても、それ以上に多くの成果をもたらすべき重いものではない。その点を十分承知してはゐるが「訓読の珍らしいもの」といふ風な、印象的な、直観的な評言を、そのまゝ領掌するわけにはゆかない。そのような評言が、近

代の浅学にとつて、一往、そのまゝ首肯できるものであつても、熱田本平家物語の筆者にとつて、如何であつたらうかといふ疑ひは、別に発つてくる。その辺の事情に肉迫してみるのが私の用字法の研究の課題なのだと考へる。

初めに、月の異名のあらはれる個所についての観察を与へてみよう。前掲の一覧は、熱田本平家物語の、巻と丁づけで出所を示したもので、今、覚一別本を参照して読み和らげた具体的な文脈によつて今一度くりかへして見よう。

如(キサラギ)

A (巻三、少将都婦)

海上も痛く荒ければ浦伝島伝して、きさらぎ十日比にぞ備前の児島に著き給ふ。

B (巻一〇 横笛)

比はきさらぎ十日余の事なれば梅津の里の春風に余所の句もなつかしく大井河の月影も霞にこめて朧也。

C (巻一二 灌頂 大原御幸)

きさらぎやよひの程は嵐烈しく余寒も未だ儘せず、嶺の白雪消やらで、谷のつららも打解けず。

D (巻一二 灌頂 女院御往生)

限ある事なれば、建久二年きさらぎの中旬に一期遂に終らせ給ひぬ。

霜(ヤヨヒ。他の用字は印刷の都合上、ここには略す)

A (卷三 少将都婦)

やよひ中の六日なれば花は未だ名残あり。

B (卷三 有王)

やよひの末に都を出て多くの波路を凌ぎつつ、薩摩海へぞ下りける。

C (卷四 厳島御幸)

やよひも半ば過ぎぬれど、霞に曇る有明の月はなほ朧なり。

D (卷一〇 海道下り)

比はやよひの始めなりけるに如何にせん都の春もをしけれど馴しあづまの花や散るらん
と仕りて、

E (卷一〇 海道下り)

遠山の花は残んの雪かと思えて都を出でて日数歴れば、やよひも半ば過ぎて春も既に暮なんとす。

F (卷一二 灌頂 大原御幸)

(前出、キサラギのCと同じ)

示 (ウツキ。他の用字はここには省略)

A (卷二 山門滅亡)

うづきは垂跡の月なれ共、幣帛を捧る人もなし。朱の玉垣神さびて、しめ縄のみや残るらん。

B (卷二 有王)

うづきさつきにも解なれば、夏衣立つを遅くや思ひけん

C (卷四 還御)

今日ほうづき一日衣更といふ事あるぞかして、各都の方をおもひやり遊び給ふに

D (卷四 ぬえ)

比はうづき十日余の事なれば雲井に郭公、二声三声音信れてぞ通りける。

E (卷七 竹生島詣)

比はうづき中の八日の事なれば、緑に見ゆる梢には春の情を残すと覚え、澗谷の鶯舌の声老いて、初音床しき郭公、折知り顔に告渡る。

F (卷一二 灌頂 大原御幸)

比はうづき廿日余の事なれば、夏草の茂みが末を分け入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じ馴れたる方もなく、人跡絶たる程も思召し知られて哀なり。

楽 (サツキ。五月 とも)

A (卷三 有王)

(前出。ウツキのBと同じ)

B (卷四 信連)

宮はさつき十五夜の雲間の月を詠めさせ給ひ、何の行方も思召しよらざりけるに、源三位の人道の使者とて、文持て忙しげに出来たり、……

C (卷四 信連)

さつき十五夜の雲間の月の顯れ出て明かりけるに、敵は無案内なり、信連は案内者也、あそこの面道に追かけてははたと切り、此所の詰りに追つめては ちやうど切る

D (巻四 大衆揃)

かゝりし程に、さつきの短夜ほのぼのとこそ明にけれ。

E (巻四 ぬえ)

比はさつき二十日余のまだ宵の事なるに、ぬえ唯一声音信れて、二声とも鳴かざりけり。

F (巻四 ぬえ)

さつきやみ名をあらはせる今宵かな

と仰せられかけたりければ、

G (巻一二 灌頂 女院出家)

さつきの短夜なれども明しかねさせ給ひつゝ、自らうちまどろませ給はねば、昔の事は夢にだにも御覽せず。

玄 (ナガツキ)

A (巻三 赦文)

都をば七月下旬に出たれども、ながつき廿日比にぞ鬼界が島には着きにける。

B (巻一二 灌頂 大原入)

文治元年ながつきの末にかの寂光院へ入らせ給ふ。道すがら四方の梢の色々なるを御覽じ過ぎさせ給ふ程に、山陰なればはや、日も既に暮れかゝりぬ。

陽 (カミナヅキ)

A (巻一二 灌頂 大原入)

かくて、かみなづき中の五日の暮方に、庭に散り敷くならの葉を踏ならして聞えければ、

B (巻一二 灌頂 六道の沙汰)

同じ秋の末にもなりしかば、昔は九重の雲の上にて見し月を、今は八重の塩路に詠めつつ、明し暮し候ひし程に、かみなづきの比ほひ、清経の中将が都のうちをば源氏の為に責め落され、鎮西をば維義が為に追出さる。

右のやうに、月の異名のあらはれる文脈は、やはり、季節的な感覚のゆたかな描写を主とする、和文的傾向の表現といふ概評を与へうるものである。たゞし、順序数による月の称呼として、今、区別したものの中にも、五月(サツキ)の場合のやうに、その表現にかゝはらず、雅名で訓すべき場合があるかも知れないが、付訓がなく音読の連字符がつけられてゐるものもあるから、ここではそれを省いて考へてみたのである。

たとへば、巻九、宇治川先陣の

比は正月廿日余の事なれば、比良の高峯、志賀の山……の条などの「正月」は、右にあげた、若干の例(キサラギのA・B、ヤヨヒのD・E・F、サツキのE)の語調から推せば、「むつき」の訓読がむしろふさはしく、山田孝雄校訂の

覚一別本では、「むつき」とふりがなをしてゐる。けれども本書では明らかに「正月」となつてゐる。平家物語のよみ方は、たとへ、同一系統に属するテキストであつても、本ごとに多少の、訓法の出入があることは、周知のとほりであつて、その点では、どの場合を、またいかなる表記を、いかによむかといふ事を、一般的に論定できないのであるから、今は、熱田本平家物語に限つて論じてゐるといふ条件をあくまでも守つて先に論をすゝめよう。

さて、右のやうに見てきても、一字の表記にこめられた、月の異名が、六種に限られるといふ特徴は、さして有意義のものともみられるわけには行かない。偶然的な現象といふべきであらう。むしろ、注目をひくのは、前引のように、訓読の側から珍しいとされる用字の点である。そこで、それらの用字がどのやうな系列に属するかを知るために、前後の時代の文献にあらはれた、月の称呼と、それにあてられた用字を一とほり考察することにす。

次に示すのが、その一覧表である。これは、類書や辞書その他を主材料にしてある。この論考に直接に関係のない事項も併せて載せるため、極めて煩雜になつてくるけれども、覚え書として別の用途に供しうるかと思ふので、あへて、文献別にくりかへしをいとはずにあげた。たゞし、調査は早卒の間に管見に入つたものだけに限つてあるから、他日の追補を期したい。

月ごとに、文献を示して、その記事を写し取つたといふ極

めて素朴なものである点を諒せられたい。また、各文献のテキストクリティークは不十分である。多くは写真、もしくは公刊の複製本ことに拾芥抄、運歩色葉集は、流布の板本や謄写本、覆刻本によつたので、(ことに近時刊行せられた静嘉堂本の運歩色葉集複製は使用に不安のある本である)不安が残る。配列は嚴密な年代順でない。

よみ方は、もともと、ふりがなをもつものは、その部分を示した。―は略されたものをさす。

一月

- 正月 親月 ムツキ(ムツヒツキ) (二中歴)
- 正月(ムツキ) 孟春(マウシユン) (字類抄)
- 正月(ムツキ) 陬(ムツキ) (節用文字)
- 大簇(―ソウ) 陬 (拾芥抄)
- 正月 大簇(―ゾク) ―ソウ) 孟春 上春 初陽 端春 (葦囊抄)
- 正月 建寅(―イーン) 肇年(テウー) (葦囊抄)
- 正月 新月(ムー) 大簇(―ソク) 孟春(マウシユン) (有坂本 和名集)
- 早春 上陽 (有坂本 和名集)
- 正月 睦月(ムツキ) 履端(リタン) 太簇(タイゾク) (有坂本 和名集)
- 端月(タンゲツ) 孟春 肇歲(テウサイ) 陬月 端春
- 青陽 甲春 王春 開春 新春 改春 初春 親月
- 発月 三陽 甫季 季頭 (運歩色葉集)
- 甫年(ホネン) 履端(リタン) 大簇(タイソク)
- 年甫(―ホ) 睦月(ムツキ) 昵月(ムツキ) 陬月(ムツキ)

孟春(マウシユン) 肇歳(テウ) (枳園本節用集)

●年甫(一ホ) 親月(ムツキ) 正月(ムツキ) 陬月(ムツキ)

睦月(ムツキ) 昵月(ムツキ) 肇歳(テウサイ)

(鈴鹿本麿芥)

●履端(リタン) 年甫(ネンホ) 陬月(ムツキ) 睦月(ムツキ)

孟春(マウシユン) 肇歳(デウサイ) (天正十八年本節用集)

●履端(リタン) 肇歳(テウサイ) 甫年(ホ) 睦月(ム)

獻歳(ケンサイ) 陬月(ムツキ) 始和(シクワ)

解凍(カイトウ) (天正十八年本節用集書入)

●年甫(ネンホ) 孟春(マウシユン) (饒頭屋本節用集)

●履端(リタン) 太簇(タイゾク) 睦月(ムツキ)

陬月(ムツキ) 孟春 孟陬(マウスウ) 肇歳(デウサイ)

(伊京集)

●太簇(一ソク) 親月(ムツキ) 睦月 (ムツキ)

正月(ムツキ) 陬(ムツキ) 制阻羅(セイタラ) (温故知新書)

●履端(リタン) 太簇(タイゾク) 年甫(ネンホ)

睦月(ムツキ) 陬月(ムツキ) 孟春(マウシユン)

肇歳(デウサイ) (黒本本節用集)

●陬(ムツキ) (黒本本節用集卷末一)

●春王 孟春 孟陬 淑氣 甫年 上陽 始和

(黒本本節用集卷末二)

●大簇(一ソク) (一) (三)

●甫年(ホネン) 履端(リタン) 王春(ワウシユン)

大簇(タイソウ) 端月(タンケツ) 陬月(ムツキ) 睦月

孟春(マウシユン) 獻歳(コンサイ) 肇歳(デウサイ)

早春(サウシユン) 開春(カイシユン) 新春(シンシユン)

初春(ソシユン) 青陽(セイヤウ) (易林本節用集)

●大簇(一ソク) 履端(リタン) 肇歳(テウサイ)

甫年(ホ) 睦月(ムツキ) 昵月(ムツキ)

獻歳(ケンサイ) 陬月(ムツキ) 始和(シクワ)

解凍(カイトウ) (元和版下学集)

●春(シユン) 修正(シュシヤウ) 青陽(セイヤウ) 王春

開春(カイシユン) 新春(シンシユン) (寛文版下学集増補)

●甫年(ほねん) 履端(りたん) 王春(わうしゆん)

陬月(むつき) 睦月(むつき) 孟春(まうしゆん)

獻歳(こんさい) 肇歳(てうさい) 早春(さうしゆん)

青陽(せいやう) (万治版真草二行節用集)

●正月(むつき)

夷鐘(いしやう) 癸春(はつしゆん) 甫年(ほねん)

甫年(ほげつ) 開端(かいたん) 解凍(かいたう)

睦月(ぼくげつ・ムツキ・ムツミツキ) 孟陬(まうすう)

孟陽(まうやう) 元会(げんくわい) 獻春(けんしゆん)

肇年(てうねん) 条風(てうふう) 三陽(さんやう)

規春(きしゆん) 蕙朔(めいさく) 上春(しやうしゆん)

首春(しゆしゆん) 春浅(しゆんせん)

春王(しゆんわう) 始和(しくは) 青蓬(せいいたつ)

陬月(すうげつ・むつき) 娠誓(すうし)

太簇(たいそく) 端月(たんげつ)

初空月(はつそらつき) 花晨(くはしん)

太郎月(たらうつき) 王春(わうしゆん) 阪(むつき)

(宝永二年版 増補広益字尽重宝記綱目)

◎大族(たいぞく) 王春(わうしゆん) 端月(たんげつ)

発春(はつしゆん) 芳春(ほうしゆん) 阪(むつき)

太郎月(たらうつき) 睦月(ぼくげつ) 三陽(さんやう)

條風(でうふう) 祝月(いはるつき)

霞初月(かすみそめつき) (増補年中用文章)

二月

◎二月 衣更着 キサラキ(キヌサラニキツキ) (二中歴)

◎二月(キサラキ) 仲春(チウシユン) (字類抄)

◎夾鐘 如(ジヨ) (拾芥抄)

◎交鐘(カウシヨウ) 仲春 仲陽 (瑩囊抄)

◎二月(キサラキ) 交鐘(キウシユウ) 仲春 仲陽 中月 (有坂本和名集)

花春(クワシユン) 夾鐘(カウセウ) 仲春 二春 仲陽 (運歩色葉集)

◎衣更著(キサラギ) 春分(キサラキ) 如月(キサラキ) (積園本節用集)

◎夾鐘(ケウセウ) 衣更着(キサラキ) 絹更月(キサラキ) (鈴鹿本麩芥)

如(キサラキ) 春分(キサラキ) 二月(キサラキ) (和版下学集)

◎夾鐘(カウセウ) 衣更着(キサラギ) 如月(キサラギ)

◎春分(キサラギ) 華朝(クワテウ) 美景(ヒケイ) (天正十八年本節用集書入)

◎衣更著(キサラギ) 惠風(ケイ) 星鳥(セイテウ) (饅頭屋本節用集)

◎仲陽 夾鐘(カウシヨウ) 夾鐘(ケウシヨウ) (伊京集)

◎衣更着(キサラギ) 如月(キサラギ) 衣更著(キサラギ) (黒本本節用集卷末一)

◎如(キサラキ) 仲春(チウシユン) 仲春(チウ) (黒本本節用集卷末二)

春分(キサラギ) (天正十八年本節用集)

◎衣更著(キサラギ) 華朝(クワテウ) 美景(ヒケイ)

◎惠風(ケイ) 星鳥(セイテウ) (天正十八年本節用集書入)

◎衣更著(キサラギ) (饅頭屋本節用集)

◎仲陽 夾鐘(カウシヨウ) 夾鐘(ケウシヨウ) (伊京集)

◎衣更着(キサラギ) 如月(キサラギ) (黒本本節用集)

◎絹更月(キサラキ) 如(キサラキ) 衣更著(キヌサラキ) (黒本本節用集)

◎春分(キサラキ) 二月(ニンクハツ) 夾鐘(フシヨウマ) (温故知新書)

◎伏舍法(ヘイシヤハ) (黒本本節用集)

◎衣更着(キサラギ) (黒本本節用集)

◎如(キサラキ) (黒本本節用集卷末一)

◎仲春 星鳥 寒食 試衣 艷陽 清明 春中 (黒本本節用集卷末二)

◎夾鐘(カウセウ) (三)

◎夾鐘(カフセウ・カウシヨウ) 衣更著(キサラギ) (三)

◎美景(ビケイ) 仲春(チウシユン) 中春(チウ) (三)

◎春半(ハハン) 春分(フン) 春中(チウ) (三)

◎芳春(ハウ) 春和(フワ) 春濃(ノウ) 花朝(テウ) (易林本節用集)

◎夾鐘(ケウシヤウ) 衣更着(キサラギ) 花朝(クワテウ) (易林本節用集)

◎美景(ビケイ) 惠風(ケイ) 星鳥(セイテウ) (和版下学集)

◎仲春(チウ) 仲半(ハハン) 仲分(フン) (和版下学集)

◎仲和(クワ) 仲濃(ヂヤウ) 芳春(パウ) (和版下学集)

如月(キサラキ) (寛文版下学集増補)

●夾鐘(かうしよう) 仲春 (万治版真草二行節用集)

●二月(キサラギ) 殷春(いんしゆん) 仲陽(ちうやう) 夾鐘(けうせう)

降婁(かうろう) 陽中(やうちう) 鳴鯛(めいてう)

如月(きさらぎ・衣更着也・デヨゲツ) 春和(しゆんくは)

春濃(しゆんでう) 四陽(しやう) 美景(びけい)

星鳥(せいてう) 令月(れいげつ) 梅見月(むめみつき)

如(きさらぎ) (宝永二年版 増補広益字尽重宝記綱目)

●仲春(ちうしゆん) 如月(じよげつ) 夾鐘(けうしやう)

殷春(いんしゆん) 四陽(しやう) 如(きさらぎ)

梅見月(うめみつき) 春半(しゆんはん) 中和(ちうくは)

春中(しゆんちう) 花景(くはけい) 衣更着(きさらぎ) (増補年中用文章)

三月

●三月 弥生月 ヤヨヒ(イヤヲヒツキ) (二中歴)

●三月(ヤヨイ) 沽洗(コセン) 曲水(コクスイ) (字類抄)

●沽洗(コセン) 病(ヘイ) (拾芥抄)

●沽洗 季春 暮春 暮陽 花月 (遠囊抄)

●三月(ヤヨイ) 清明 芳即(ハウソク) 清氣 嘉月 (有坂本和名集)

●沽洗(コセン) 弥徃(ヤヨイ) 楔月 蚕月 (運歩色葉集)

●姑洗(コセイ) 更衣(カウイ) 弥生(ヤヨイ) 季春 暮春

●晚春(バンシユン) 弥生(ヤヨイ) 窠(ヤヨイ) (枳園本節用集)

窠(ヤヨイ) 姑洗(コセイ) (枳園本節用集)

●桃浪(タウラウ) 愈老(ヤヨイ) 弥生(ヤヨイ)

霧(ヤヨイ) 三月(ヤヨイ) 窠(ヤヨイ) 姑洗(コセン) (鈴鹿本塵芥)

清明(セイメイ) 弥生(ヤヨイ) 寝(ヤヨイ) 姑洗(コセン) (天正十八年本節用集)

●弥生 桃浪(トウロウ) (天正十八年本節用集)

●弥生(ヤヨイ) 窠(ヤヨイ) 季春(キシユン) (饅頭屋本節用集)

●弥生(ヤヨヒ) 窠(ヤヨヒ) 姑洗(コセン) (伊京集)

●姑洗(コセン) 愈老(ヤヨヒ) 弥生(ヤヨヒ) 霧(ヤヨヒ) (温故知新書)

逝瑟吐 弥生(ヤヨイ) 窠(ヤヨイ) 窠 姑洗(コセイ) (黒本本節用集)

●窠(ヤヨイ) 窠 (黒本本節用集卷末一)

●暮春 季春 萍生 揄雨 芳陽 上己 (〃〃)

●姑洗(コセン) (〃〃)

●晚春(バンシユン) 暮春(ボシユン) 桃浪(タウラウ) (易林本節用集)

弥生(ヤヨヒ) 姑洗(コセン) 季春(キシユン) (元和版下学集)

●姑洗(コセン) 弥生(ヤヨイ) 桃浪(トウラウ) (寛文版下学集増補)

●季春(キ) 晚春(バンシユン) (寛文版下学集増補)

◎晩春(ばんしゆん) 暮春(ぼしゆん) 弥生(やよひ)

姑洗(こせん) 季春(きしゆん) (万治版真草二行節用集)

◎三月(ヤヨヒ)

莫々(ばくく) 暮陽(ぼやう) 宵月(へいげつ)

緑秀(りよくしう) 桐月(とうげつ) 花老(くはらう)

蠶月(やよひのつき) 弥生(やよひ) 惠風(けいふう)

楔月(けいげつ) 姑洗(こせん) 重三(てうさん)

殿春(でんしゆん) 喜月(きげつ)

鶯乱啼(あうらんてい) 桃浪(とうらう) 帰春(きしゆん)

春杪(しゆんべう) 春惜月(はるおしみつき)

春末(しゆんぱつ) 暮春(ぼしゆん) 縹麻(しま)

浴沂(よくき) 晩春(ばんしゆん・クレノハル)

桜月(さくらづき) 花見月(はなみつき) 病(やよひ)

◎姑洗(こせん) 春晩(しゆんばん) 弥生(やよひ)

莫春(ばくしゆん) 五陽(ごやう) 季春(きしゆん)

花見月(はなみつき) 晩春(ばんしゆん) 鶯時(わうじ)

竹秋(ちくしう) 春末(しゆんまつ) 桜月(さくらづき)

病(やよひ) (増補年中用文章)

四月

◎四月 溲疏花月 ウツキ(ウノハナツキ) (二中歴)

◎四月(ウツキ) 卯月(ウツキ) 麦秋(バクシウ) 孟夏

(字類抄)

◎仲呂 余 (拾芥抄)

◎仲呂 孟夏 初夏 首夏 維夏(イカ) (璫璫抄)

◎四月(ウー) 仲呂(ーリヨ) 孟夏 首夏 初夏

薄暑(ーシユ) (有坂本和名集)

◎卯月 初夏 首夏 仲呂 朱明 朱夏 孟夏 (運歩色葉集)

◎卯月(ウツキ) 余月(ウツキ) 孟夏(マウカ)

朱夏(シユカ) 首夏(シユカ) (枳園本節用集)

◎卯月(ウツキ) 余月 孟夏(マウカ) 朱夏(シユカ) (鈴鹿本塵芥)

◎卯月(ウツキ) 余月 孟夏(マウカ) 朱夏(シユカ) (天正十八年本節用集)

◎麦秋(バクシウ) 卯月 修景(シユケイ) (天正十八年本節用集書入)

◎卯月(ウツキ) 孟夏 (饑頭屋本節用集)

◎仲呂(チウリヨ) 余月(ウツキ) 卯月 (伊京集)

◎卯月(ウツキ) 余(ウツキ) 仲呂(チウリヨ) 類沙茶 (温故知新書)

◎卯月(ウツキ) 余月(ウツキ) 孟夏(マウカ) (黒本本節用集)

◎余(ウツキ) (黒本本節用集卷末一)

◎初夏 柳華 麦風 余月 孟夏 首夏 朱明 (〃〃二)

◎中呂 (〃〃三)

◎麦秋(バクシウ) 梅月(バイゲツ) 卯月(ウツキ)

孟夏(マウカ) 初夏(ウカ) 清至(セイシ)

仲呂(チウリヨ) (易林本節用集)

◎仲呂(チウリヨ) 麦秋(バクシウ) 卯月(ウー) 修景(シユケイ) (元和版下学集)

◎孟夏(モウカ) 初夏(シヨウ) 清玉(セイギヨク) 朱夏(シユカ) (寛文版下学集増補)

◎梅月(ばいげつ) 卯月(うづき) 孟夏(まうか) (万治版真草二行節用集)

◎四月(ウツキ) 卯月

維夏(いか) 畏日(いじつ) 仲呂(ちうりよ)

六陽(りくやう) 庚伏(かうふく) 夏半(かはん)

槐夏(くわいか) 猷梅(けんばい) 伏暑(ふくしよ)

純陽(じゆんやう) 朱明(しゆめい) 朱夏(しゆか)

蘭池(らんち) 炎鐘(えんしよう) 清至(せいし)

清夏(せいしか) 清和(せいくわ) 星火(せいくわ)

正陽(しやうやう) 麦秋(ばくしう) 正月(せいげつ)

首夏(しゆか) 卯花月(うのはなづき) 余(うづき)

(宝永二年版 増補広益字尽重宝記綱目)

◎卯月(うづき) 孟夏(もうか) 中呂(ちうりよ)

首夏(しゆか) 正陽(せいやう) 余(うづき)

花残月(はなのこりつき) 余月(よげつ) 新夏(しんか)

早夏(さうか) 乏月(ぼくげつ)

得長羽月(とくちうやうげつ) (増補年中用文章)

五月

◎五月 早苗月 サツキ(サナヘツキ) (二中歴)

◎五月(サツキ) 仲夏(チウカ) 蕤賓(スイヒン) 端午(タンコ) (字類抄)

◎蕤賓(スイヒン) 臯(カウ) 超夏 (拾芥抄)

◎蕤賓(スイヒン) 仲夏 超夏 (壘囊抄)

◎蕤賓(シヤウヒン) 仲夏(一カ) 朱明 朱夏 (有坂本和名集)

盛暑(シヤウ) 仲夏 蕤賓(スイヒン) 早苗月 (運歩色葉集)

◎梅月(バイゲツ) 仲夏 蕤賓(スイヒン) 早苗月 (積園本節用集)

◎五月(サツキ) 臯月(サツキ) 蕤賓(スイヒン) (鈴鹿本夷芥)

◎五月(サツキ) 臯月(サツキ) 早苗月(サツキ) (餓頭屋本節用集)

◎蕤賓(スイヒン) (天正十八年本節用集)

◎蕤賓(スイヒン) 星火(セイクワ) 東井(トウセイ) (天正十八年本節用集書人)

◎梅月(ハイ) 星火(セイクワ) 東井(トウセイ) (天正十八年本節用集書人)

◎臯月(サツキ) (餓頭屋本節用集)

◎梅月(バイゲツ) 臯月(サツキ) 蕤賓(スイヒン) (伊京集)

◎五月(サツキ) 臯(サツキ) 早苗月(サツキ) (温故知新書)

◎五月(サツキ) 臯(サツキ) 蕤賓(スイヒン) (黒本本節用集)

◎臯(サツキ) (黒本本節用集卷末)

◎仲夏 梅天 鶉首 炎景 端午 臯月 (〃) (二)

◎蕤賓(スイヒン) (〃) (三)

◎ 臯月(サツキ) 盛夏(セイカ) 蕤賓(スイヒン)

(易林本節用集)

◎ 蕤賓(スイヒン) 梅月(バイー) 送梅月(サーノー)

星火(セイクワ) 東井(トウセイ) 臯月(サツキ)

(元和版下学集)

◎ 盛夏(セイカ) 五月雨(サミダレマ)

(寛文版下学集増補)

◎ 臯月(さつき)

◎ 五月(サツキ) 畏景(いけい) 梅天(ばいてん) 東井(とうせい)

臯月(かうげつ・サツキ) 景風(けいふう)

午月(ごげつ・ムマノツキ) 条景(でうけい)

小巧(せうかう) 鶉首(じゆんしゆ) 炎天(えんでん)

星月(せいげつ) 蕤賓(すいひん)

月不見月(つきみぬつき) 臯(さつき)

(宝永二年版 増補広益字尽重宝記綱目)

◎ 仲夏(ちうか) 午夏(ごか) 鶉月(じゆんげつ)

臯月(かうげつ) 南訛(なんくは) 臯(さつき)

早苗月(さなへつき) 梅天(ばいてん) 夏五(かご)

盛夏(せいカ) 橘月(きつげつ) 月不見月(つきみぬつき)

(増補年中用文章)

六月

◎ 六月 皆尽月 ミナツキ(ミナツキ月) 無水月 (二中歴)

◎ 六月(ミナツキ) 盛熱(ミナツキ) 林鐘(リンシヤウ)

晩夏(バンカ)

◎ 林鐘 且

◎ 林鐘 季夏 晩夏 極暑(コクシヨ)

◎ 六月(ミナー) 林鐘 季夏(キー) 晩夏(ハン)

盛夏 暑月(シヨ)

◎ 林鐘 水皆尽月 季夏

◎ 晩夏(ーカ) 林鐘(リンセウ) 且月(ミナツキ)

皆熱(ミナツキ)

◎ 極熱(ミナツキ) 盛熱(ミナツキ) 無水月(ミナツキ)

皆熱月(ミナツキ)

◎ 林鐘(リンセウ) 且月(ミナツキ) (天正十八年本節用集)

◎ 林鐘(リンセウ) 且月(ミナツキ) (饅頭屋本節用集)

◎ 林鐘(リンシヨウ) 且月(ミナツキ) 皆熱(ミナツキ) (伊京集)

◎ 極熱(ミナツキ) 盛熱(ミナツキ) 無水月(ミナツキ)

且(ミナツキ) 林鐘(リンシヨウ) 波達羅雖 (温故知新書)

◎ 林鐘(リンシヨウ) 且月(ミナツキ) 皆熱(ミナツキ) (黒本本節用集)

◎ 且(ミナツキ) (黒本本節用集卷末一)

◎ 薦弧 溽暑 景短 窮夏 (黒本本節用集卷末二)

◎ 林鐘 (黒本本節用集卷末二)

◎ 晩夏(ーカ) 林鐘(リンシヨウ) 神月(カミツキ)

◎ 歌見月 葉月(ヨウケツ) 季夏(キカ) 皆月(ミナツキ)

◎ 水無月(ミナツキ) 夏末 徂暑 酷暑 伏暑 暑劇

◎林鐘(リンシヨウ) (易林本節用集)
(元和版下学集)

◎季夏(キカ) 晩夏(ハン) 夏末(ハツ) 徂暑(ソシヨ)

酷暑(コクシヨ) 伏暑(フクシヨ) 暑劇(シヨケキ)

水無月(ミナツキ) 且月(ミナツキ) 皆熱(ミナツキ)

皆月(ミナツキ) (寛文版下学集増補)

◎晩夏(ばんか) 林鐘(りんせう) 葉月(ようげつ)

季夏(きか) 皆月(みなづき) 水無月(みなづき)

(万治版夷草二行節用集)

◎六月(ミナツキ)

赫曦(かくぎ) 火老(くはらう) 元陽(げんやう)

朔月(さくげつ) 金柔(きんじう) 且月(たんげつ)

ミナツキ 鞆火(じゆんくは) 暑劇(しよげき)

溽暑(じよくしよ) 徂暑(そしよ) 風待月(かぜまちづき)

鳴神月(なるかみづき) 常夏月(とこなつつき)

林鐘(りんしやう) (俗に鐘の字を鐘の字と心得「はやしのか

且(みなつき) (宝永二年版 増補広益字尽重宝記綱目)

◎季夏(きか) 林鐘(りんしやう) 庚伏(かうふく)

徂暑(そしよ) 晩夏(ばんか) 且(みなづき)

無水月(みなづき) 鞆火(じゆんくは) 陽水(やうへう)

熱月(ねつげつ) 溽暑(じよくしよ)

風待月(かぜまちづき) (増補年中用文章)

七月

◎七月 書披月 フミツキ(フミヒロケツキ) (二中歴)

◎七月(フツキ) 夷則(イソク) 初秋(ソシウ) (字類抄)

◎夷則 相 (拾芥抄)

◎夷則 孟秋 上秋 初秋 初商 新秋 肇秋(テウ) (蓋瓿抄)

◎夷則(イソク) 孟秋 初秋 涼天 涼月 (有坂本和名集)

◎文月 親月 夷則(イソク) 孟秋 初秋 (運歩色葉集)

◎夷則(イソク) 孟秋(マウシウ) 文月(フミツキ)

親月(フミツキ) 相(フミツキ) (枳園本節用集)

◎親月(フツキ) 文月(フミツキ) 文暴月(フミツキ)

七月(フツキ) 相(フツキ) (鈴鹿本塵芥)

◎夷則(イソク) 孟秋(マウジウ) 親月(フミツキ) (天正十八年本節用集)

相(フミツキ)

◎文月(フミ) 親月(シンゲツ) (天正十八年本節用集書人)

◎夷則(イソク) 孟秋 文月(フミツキ) (饅頭屋本節用集)

◎夷則(イソク) 文月(フミツキ) 相(フツキ) (伊京集)

親月(フツキ)

◎文月(フツキ) 文暴月(フミツキ) 相(フツキ)

夷則(キソク) 額温縛庚門 (温故知新書)

◎夷則(イソク) 孟秋(マウシウ) 文月(フミツキ) (黒本本節用集)

親月(フツキ) (黒本本節用集)

◎相(フツキ) (黒本本節用集)

◎孟秋 肇秋 鶉尾 金柔 流火 殘熱 (黒本本節用集卷末二)

◎夷則 (三)

◎夷則(イソク) 涼月(リヤウゲツ) 初秋(ソシウ)

孟秋(マウシウ) 文月(フミツキ) 早秋(ーシウ)

初商(シヨシヤウ) (易林本節用集)

◎夷則(イソク) 文月(フミツキ) 親月(シンゲツ)

(元和版下学集)

◎孟秋(モウシウ) 早秋(サウシウ) 初商(シヨシヤウ)

涼月(リヤウケツ) 立田姫(タツタヒメマ)

(寛文版下学集増補)

◎夷則(いそく) 孟秋(まうしう) 文月(ふみつき)

(万治版真草二行節用集)

◎七月(フミツキ)

夷則(いそく) 烹葵(ほうき) 文披月(ふみひらきつき)

蘭月(らんげつ) 蘭秋(らんしう) 親月(しんげつ)

七夕月(たなばたつき) 鶉尾(じゆんび)

蕭辰(しょうしん) 賓涼(ひんりやう)

女郎花月(をみなへしづき) 孟秋(まうしう)

初秋(しよしう) 相月(さうげつ・フミツキ)

相(ふづき) (宝永二年版 増補広益字尽重宝記綱目)

◎孟秋(もうしう) 夷則(いそく) 初秋(しよしう)

蘭月(らんげつ) 新秋(しんしう) 相(ふつき)

文披月(ふみひろげつき) 首秋(しゆしう)

商節(しやうせつ) 饑暑(せんしよ) 葉落(やうらく)

(増補年中用文章)

八月

◎八月 葉落月 ハツキ(ハヲチツキ) (二中歴)

◎八月(ハツキ) 南呂(ナンリヨ) 仲秋(チウシウ) (字類抄)

◎南呂 壯 (拾芥抄)

◎南呂 仲秋 仲商 (塗藁抄)

◎南呂 仲秋(チウシユウ) 涼商(リヤウシヤウ)

金涼(キンリヤウ) 迎寒(カイカン) (有坂本和名集)

◎葉月(ーツキ) 南呂 仲律 仲商(ーシヤウ) 仲秋 桂月 (運歩色葉集)

◎葉月(ハツキ) 南呂(ナンリヨ) (枳園本節用集)

◎南呂(ナンリヨ) (鈴鹿本塵芥)

◎壯(ハツキ) 葉月(ハツキ) (天正十八年本節用集)

◎葉月(ハツキ) (天正十八年本節用集書入)

◎葉月(ハツキ) 仲商 南呂(ナンリヨ) (伊京集)

◎南呂(ナンリヨ) 葉月(ハツキ) 壯(ハツキ) 迎棘底 (温故知新書)

◎葉月(ハツキ) 壯(ハツキ) 南呂 (黒本本節用集)

◎鷹来 薺去 剝藜 金景 円月 (黒本本節用集卷末二)

◎壯(ハツキ) (黒本本節用集卷末一)

◎南呂 (三)

◎南呂(ーリヨ) 迎寒(ケイカン) 仲秋 深秋 桂秋 秋半

秋高 秋中 秋清 秋涼 (易林本節用集)

◎南呂(ナンロ) 葉月(ハツキ) (元和版下学集)

◎仲秋(チウシウ) 深秋(ジンシウ) 桂秋(ケイシウ)

秋半(一ハシ) 秋高(一カウ) 秋中(一チウ)

秋清(一セイ) 秋涼(一リヤウ) (寛文版下学集増補)

●仲秋 深秋 桂秋 秋半 秋高 秋中 秋清 秋涼

南呂(なんりよ) 迎寒(けいかん) (万治版真草二行節用集)

●八月(ハツキ)

鷹初来(はつき) 葉月(はつき・えうげつ)

月見月(つきみづき) 剝棗(はくさう) 豆雨(とうう)

王秋(わうしう) 秋風月(あきかぜづき)

鷹来(がんらい) 南呂(なんりよ) 桂秋(けいしう)

迎寒(げいかん) 月夕(げつせき)

壯月(さうげつ・ハツキ) 商音(しやういん)

秋杜(しうさう) 秋涼(しうりやう) 寿星(じゆせい)

深秋(じんしう) 蕭瑟(しやうしつ) 蘋風(ひんふう)

正秋(せいしう) 清秋(せいしう) 西影(せいけい)

水涸(すいかく) 燕去(えんきよ) 壯(はつき) (宝永二年版 増補広益字尽重宝記綱目)

●仲秋(ちうしう) 南呂(なんりよ) 桂月(けいげつ)

西影(せいゑい) 清秋(せいしう) 壯(はつき)

月見月(つきみづき) 鷹来(がんらい) 秋分(しうぶん)

壯月(さうげつ) 商音(しやういん)

秋風月(しうふうづき) (増補年中用文章)

九月

●九月 夜長月 ナカツキ(ヨナカツキ) (二中歴)

●九月(ナカツキ) 晚秋(バンシウ) 重陽 (字類抄)

●九月(ナカツキ) 蚤(ナカツキ) (節用文字)

●無射(フエキ) 玄 (拾芥抄)

●無射(フエキ) 季秋 暮秋 窮秋 杪秋(へウシウ) 抄商 (搥麩抄)

季商 季白 玄月

●季秋(キ) 折秋(セツ) 季商(キ) 暮秋(ホ) (有坂本和名集)

白藏(ハクサウ)

●長月(ナガツキ) 季秋 菊月 玄月 無射 (運歩色葉集)

●晚秋(一シウ) 長月(ナカツキ) 玄月(ナカツキ) (枳園本節用集)

無射(フエキ) 菊月(キク) (鈴鹿本麩芥)

●長月(ナカツキ) 無射(フエキ) (天正十八年本節用集)

●玄月(ナガツキ) 菊月(キクゲツ) (天正十八年本節用集)

●長月 重陽 (天正十八年本節用集書人)

●玄月(ナガツキ) 無射(フエキ) 少春 (伊京集)

●長月(ナカツキ) 玄(ナカツキ) 無射(フシヤマ) (温故知新書)

未伽始羅 長月(ナガツキ) 玄月(ナカツキ) 無射(フエキ) (黒本本節用集)

●玄(ナカツキ) (黒本本節用集)

●季商 菊月 白藏 授衣 素月 杪秋 (黒本本節用集卷末二)

●無射(フシヤ) (黒本本節用集卷末二)

●晚秋(バンシウ) 暮秋 長月(チャウゲツ) 長月(ナガツキ) (易林本節用集)

無射(フエキ) 季秋(キシウ) 季商(キシヤウ)

窮秋(キウシウ) 菊月(キクゲツ) (易林本節用集)

◎無射(ブエキ) 長月(ナカツキ) (元和版下学集)

◎季秋(キシウ) 季商(キシヤウ) 菊月(キクケツ)

窮秋(キウシウ) 晩秋(ハンシウ) 玄月(ナガツキ) (寛文版下学集増補)

◎晩秋(ばんしう) 暮秋(ぼしう) 長月(ちやうげつ)

長月(ながつき) 無射(ぶえき) 季秋(きしう)

季商(きしやう) 菊月(きくげつ) (万治版真草二行節用集)

◎九月(ナガツキ)

玄月(げんげつ・ナガツキ) 衣袂(いかう)

菊月(きくげつ) 授衣(じゆい) 鴻賓(こうひん)

杪秋(べうしう) 暮商(ぼしやう) 築場(ちくじやう)

涼秋(りやうしう) 無射(ぶえき) 窮秋(きうしう)

季白(きはく) 季商(きしやう) 暮秋(ぼしう)

紅葉月(もみぢづき) 晩秋(ばんしう・クレノアキ)

長月(ながつき) 玄(ながつき)

◎季秋(きしう) 無射(ぶえき) 涼秋(れうしう) (宝永二年版 増補広益字尽重宝記綱目)

授衣(じゆい) 菊月(きくげつ) 玄(ながつき)

紅葉月(もみぢづき) 霜晨(さうしん) 晩秋(ばんしう)

玄月(げんげつ) 暮秋(ぼしう) 築場(ちくぢやう)

(増補年中用文章)

十月

◎十月 無神月 カミナツキ(カミナシツキ) (二中歴)

◎十月(カミナツキ) 応鐘(ソトウ) (字類抄)

◎十月(カミナツキ) 陽(カミナツキ) (節用文字)

◎応鐘 陽 孟冬 初冬 陽月 玄英 上冬 (拾芥抄)

◎応鐘(ヨウシユウ) 孟冬 開冬(トウ) 初冬 玄月 (壘囊抄)

◎応鐘(ヨウセウ) 神無月(カミナツキ) 孟冬 初冬 小春 (有坂本和名集)

神有月 出雲 神有月 出雲 (運歩色葉集)

◎神無月(カミナツキ) 陽月(カミナツキ) 神有月 出雲 (枳園本節用集)

孟冬(マウトウ) 神無月(カミナツキ) 陽月(カミナツキ) 陽月 (天正十八年本節用集)

◎孟冬(マウトウ) 小春(セウシユン) (天正十八年本節用集)

◎神無月(カミナツキ) 孟冬 (饅頭屋本節用集)

◎神無月(カミナツキ) 孟冬 (伊京集)

◎神無月(カミナツキ) 陽(カミナツキ) 応鐘(オウシヨウ) (温故知新書)

報沙月 神無月(カミナツキ) 陽月(カミナツキ) 孟冬(マウトウ) (黒本本節用集卷末一)

◎霜月(シモツキ) 小春(セウシユン) (黒本本節用集)

◎陽(ナカツキマ) (黒本本節用集卷末一)

◎神無月 閉寒 開炳 納稼 小春 孟冬 (黒本本節用集卷末二)

◎神無月 閉寒 開炳 納稼 小春 孟冬 (黒本本節用集卷末二)

◎神無月 閉寒 開炳 納稼 小春 孟冬 (黒本本節用集卷末二)

◎神無月 閉寒 開炳 納稼 小春 孟冬 (黒本本節用集卷末二)

◎神無月 閉寒 開炳 納稼 小春 孟冬 (黒本本節用集卷末二)

◎神無月 閉寒 開炳 納稼 小春 孟冬 (黒本本節用集卷末二)

◎神無月 閉寒 開炳 納稼 小春 孟冬 (黒本本節用集卷末二)

◎神無月 閉寒 開炳 納稼 小春 孟冬 (黒本本節用集卷末二)

◎神無月 閉寒 開炳 納稼 小春 孟冬 (黒本本節用集卷末二)

応鐘(オウセウ・ヨウセウ) 陽月(ヤウゲツ)

孟冬(マウトウ) 玄英(ケンエイ) 小春(セウシユン)

(易林本節用集)

◎ 応鐘(ヨウシヨウ) 神無月(カミナツキ)

神有月(カミアリツキ) 出雲 (元和版下学集)

◎ 孟冬(モウトウ) 小春(セウシユン) 陽月(ヤウケツ)

玄英(ゲンエイ) (寛文版下学集増補)

◎ 陽月(かみなづき) 神無月 陽月(やうげつ)

孟冬(まうとう) 玄英(けんえい) (万治版真草二行節用集)

◎ 十月(カミナヅキ) 小春(せうしゆん・こはる) 孟冬(まうとう)

無神月(かみなづき) 初冬(しよとう) 方冬(はうとう)

暢月(ちやうげつ) 上冬(じやうとう) 早冬(さうとう)

嚴冬(げんとう) 吉月(きつげつ) 秦而(しんしやう)

応鐘(おうせう) 盈春(ゑいしゆん) 陽月(やうげつ)

玄冬(げんとう) 初霜月(はつしもつき)

時雨月(しぐれづき) 陽(かみなづき)

(宝永二年版 増補広益子尽重宝記綱目)

◎ 陽月(やうげつ) 応鐘(をうしやう) 吉月(きつげつ)

小春(せうしゆん) 始氷(しへう) 陽(かみなづき)

無神月(かみなづき) 孟冬(もうとう) 初冬(しよとう)

良月(りやうげつ) 新冬(しんとう) 時雨月(しぐれづき)

(増補年中用文章)

十一月

◎ 十一月 霜降月 シモツキ(シモフリツキ) (二中歴)

◎ 十一月(シモツキ) 霜月(シモツキ) 黄鐘(クワウ)

仲冬(チウトウ) (字類抄)

◎ 黄鐘 辜(コ) (拾芥抄)

◎ 黄鐘 仲冬 子月 (瑩囊抄)

◎ 霜月 黄鐘 仲冬 霜寒 (有坂本和名集)

◎ 霜月 黄鐘 仲冬 暢月 (運歩色葉集)

◎ 暢月(チャウケツ) 霜月(シモツキ) (枳園本節用集)

◎ 辜(シモツキ) 霜月(シモツキ) 霏(シモツキ) (鈴鹿本塵芥)

冷(シモツキ) (天正十八年本節用集)

◎ 霜月(シモツキ) 辜(シモツキ) (天正十八年本節用集)

◎ 暢月(チャウ) 六呂(リクロ) 陽復(ヤウフク) (天正十八年本節用集書入)

◎ 霜月(シモツキ) (饅頭屋本節用集)

◎ 暢月(チャウケツ) 黄鐘(ワウシヨウ) 辜(シモツキ) (伊京集)

霜月(シモツキ) (伊京集)

◎ 黄鐘(クハウシヨウ) 霜月(シモツキ) 暢月(シャウ)

摩袂月 (温故知新書)

◎ 暢月(チャウケツ) (黒本本節用集)

◎ 辜(シモツキ) (黒本本節用集卷末一)

◎ 仲冬 子月 始裘 一陽 (黒本本節用集卷末二)

◎ 黄鐘 (〃) (三)

◎ 暢月(チャウケツ) 陽復(ヤウフク) 仲冬(チウトウ)

黄鐘(ワウセウ) 六呂(リクリヨ) (易林本節用集)

●黄鐘(ワウ) 霜月(シモ) 暢月(チャウ)

六呂(リクロ) 陽復(ヤウフク) (元和版下学集)

●仲冬(チウトウ) 葦月(シモツキ) (寛文版下学集增補)

●暢月(ちやうげつ) 陽復(やうぶく) (万治版真草二行節用集)

●十一月(シモツキ)

霜月(さうがつ) しもつき 一陽(いちやう)

日凍(につとう) 冰壯(へうさう) 黄鐘(わうせう)

霜天(さうてん) 霜朝(さうてう) 雲半(うんはん)

芸生(うんせい) 陽復(やうふく) 復月(ふくがつ)

風寒(ふうかん) 朔易(さくい) 葦月(こげつ)

鳴月(あうげつ) 千月(せんげつ) 星記(せいき)

子月(しげつ) ねのし 霜降月(しもふりつき)

雪見月(ゆきみつき) 神楽月(かぐらつき)

●霜月(さうげつ) 仲冬(ちうとう) 黄鐘(わうしやう)

暢月(てうげつ) 新陽(しんやう) 葦(しもつき)

神楽月(かぐらつき) 復月(ふくげつ) 冬半(とうはん)

霜天(さうてん) 星記(せいき) 雪見月(ゆきみつき)

(増補年中用文章)

十二月

●十二月 師馳 シハス(シハセツキ) (二中歴)

●十二月(シハス) 師馳(シハス) 藟月(シハス)

晩冬(ハントウ) 大呂(タイリヨ) 臘(藟)月(ラフケツ)

●臘月(ラウ) (字類抄) (節用文字)

●大呂 茶(サ) (捨芥抄)

●大呂 季冬 暮冬 晩冬 杪冬 窮冬 黄冬 極月 臘月

(壘囊抄)

●獬月(シハス) 大呂 季冬 晩冬(ハシ)

急景(キウケイ) 調年 (有坂本和名集)

●大呂(ーリヨ) 極月 臘月 師趨 (運歩色葉集)

●晩冬(ートウ) 藟月(ラウゲツ) 臘月(ラウゲツ)

月迫(ゲツハク) 蜡月(サゲツ) 極月(キョクゲツ)

師趨(シハス) (枳園本節用集)

●大呂 臘月(ラウケツ) 藟月(ラウケツ) 極寒(シワス)

師走(シワス) 師走月(シワス) 臘(シワス) 除(シワス)

除月(シハス) 師趨(シハス) 月迫(ケツハク)

●臘月(ラウゲツ) 藟月 月迫(ゲツハク) 蜡月(サゲツ)

除(シワス) 師趨(シワス) (天正十八年本節用集)

●臘月 師趨(シハス) (天正十八年本節用集書入)

●臘月(ラウゲツ) 月迫(ゲツハク) 蜡月(サツキマ)

師趨(シハス) (饅頭屋本節用集)

●太呂(タイリヨ) 藟月(ラウゲツ) 臘月 蜡月(サゲツ)

師趨(シハス) (伊京集)

●極寒(シハス) 師走(シハス) 臘(シハス) 除(シハス)

正月 大族
 二月 狹鍾
 三月 沽洗
 四月 仲呂
 五月 蕤賓
 六月 林鐘
 七月 夷則
 八月 南呂
 九月 無射
 十月 應鍾
 十一月 黃鍾
 十二月 大呂

者イ

新撰類聚往来

大簇 (一ソウ) 魁月 (クワイー)
 仲春 夷則 (イソク)
 沽洗 (コセイ) 季春
 中呂 (一リヨ) 正陽
 蕤賓 (スイヒン) 梅天
 林鐘 (リンセウ) 簾月 (レンー)
 夷則 (イソク) 孟秋
 南呂 中商
 無射 菊月
 應鍾 陽月

暢月 黃鍾
 大呂 窮月

真名本伊勢

親月 (むつき) 大簇 (むつき)
 夷鐘 (きさらぎ)
 沽洗 (やよひ)
 蕤賓 (さつき)
 林鐘 (みなつき)
 無射 (ながつき)
 應鍾 (かみなつき)
 大呂 (しはす)

さて、以上の例を通覧すると、同一であるべきものが、ものによつて類れた形になつてゐるもののあることが知られる。

三、熱田本平家の場合

熱田本平家物語の、用字で、玉井氏が問題に指摘せられた一連のものは、多少ひろく、右のやうにあつめた背景に位地させてみると、自らその性格が明らかになつてくる。即ち、たとへばヤヨヒにあたる、いくつかの用字は、一つの字の異体ではないかといふ疑が生ずる。熱田本平家物語が、一々に附訓をとみなふこと自体は、そのどの用字も、訓法を示さな

いとよく理會できないやうな、いはゞ難字に属する用字であつたことを物語るであらうが、他に類例を絶するといふべきものではないことがわかる。

枳園本節用集や、鈴鹿本塵芥、天正十八年本節用集、饅頭屋本節用集、伊京集、黒本本節用集、同卷末附記、温故知新書などによると、熱田本における「𠂔」をもつ字体以外の字はほゞうらづけが出来る。「𠂔」をもつ字体は、拾芥抄版本に見えるが、その「𠂔」は、もと、「𠂔」からの変容と見ることが可能である。また、「𠂔」と「𠂔」との通用も、他に例が少くない(籠―籠、窠―窠など)。また「𠂔」と「𠂔」とも交替することが、他に例を見る(宵―宵など)。「才」と「木」も交替する(權―權など)。また「𠂔」と「𠂔」とも交替する(寐―寐、寤―寤など)。

次に、ウヅキについては、「余」「示」二体あるが、一覽表によつて、近似をもとめると、「余」に帰すべきものと考へられる。「示」は「余」の類れた形であらう。

第三の問題、サツキの「楽」は、熱田本に二例見えるが、恐らく「鼻」の類れたもので、「白」を中核にして、下半部が、左右に分れてせり上り、その結果を、正当化せんために「十」を「木」に変じたものと考へられる。

九月のナガツキを「玄」とし、十月のカミナヅキを「陽」とするのは、珍しいことでない。

このやうにして見てくると、熱田本平家物語の中の、月の異名の用字に感じる珍しさは、要するに、当代の用字の一般

に通眺しないところから生ずるものであることが、ほゞ明らかにになる。

四、余 説

(一) 一字の、月の異称の由来

漢字一字であらはず月の異称は、拾芥抄にすで見えるところである。節用文字には、ムツキの「𠂔」のみが見えるが本文が一部しか既存しないから、他は明らかでない。字類抄にも当然見えてしかるべきかと思はれるに拘らず、全く見えないのはやゝ意外だが、字類抄の中で、異名は、多く疊字にかゝる事項と考へられてゐたかと推定される点から一往理由づけができる。

拾芥抄に、ひとそろひになつて見える、一字の異称は、熱田本平家物語の場合を、全く覆つて余りあり、その由来は遠く溯ることが出来る。

即ち、ここに仰々しく引用するのは全くこがましいこと

だが爾雅(古逸叢書所収、影宋蜀大字本による)巻中に

正月為陬 離騷云撰提貞於孟陬

二月為如

三月為病

四月為余

五月為臯

六月為旦

七月為相

八月為牡

九月為玄 國語云至於玄月是也

十月為陽 純陰用事嫌於無陽故以名云

十一月為章

十二月為涂

皆月之別名自歲陽至此其事義皆所未詳通者故闕而不論とあつて、右の一字の月の異名の爾雅の出自であることが明らかである。むろん、それは、一般的に抽象的に云へるだけで、熱田本平家物語に現はれるまでの経路に迂余曲折がなくストレートにつらなるものだと考へるべきではなく、媒介になるものがあつたと見る方が穩当であらう。

たゞ、先にふれた様に、用字の一つ一つの字体には、なほ問題が残る。名義抄には

竊 披命又泥詠又皮命反三日（ママ。月のあやまりであらう）

とあつて、熱田本平家物語の用字に全く一致するものが、一つも見えない。

大簇・夾鐘・沽洗の一組が、礼記月令から発するものであ

ることは、玉燭宝典などを一見せられるならば明白にのべてある。これは今更にいふまでもない。

(二) 清濁・音訓について

ミナツキ・ナガツキに関して、ツキの部分をつキと濁音によむ証が、節用集の若干のものに見えてゐる。なほ、またナガツキの別名、「菊月」は、キクゲツと音読すべく、キクツキとよむやうな指示を与へた、昨今の書物は、十分の根拠あつてのことであるかどうか、疑をさしはさむ。

キリシタン版の、日ボ辞書にも、ロドリゲス大文典にも月のよび名についての記載があるが、今、ここでは全部をあげない。たゞ、ナカツキについては、日ボ辞書はツキを濁音ツキとするに反し、ロドリゲス大文典は、ツキの清書の形をとつて居り、また、「ムツキ」「キサラギ」「ヤヨヒ」の一そろひを、詩的な言ひ方とのべ、「大簇」「夾鐘」「沽洗」の一そろひを、比喩的な言ひ方として、普通の「正月」「二月」「三月」の類とならべ、三つの系列にまとめてゐる。ナガツキのよみは、おそらくナガツキの訓とならんで行はれたものと推定できる。